

第18回「助成研究吉田秀雄賞」受賞者決定

当財団は、第18回「助成研究吉田秀雄賞」の受賞者を決定しました。

本賞は「広告・広報・メディアを中心とするマーケティングおよびコミュニケーション」に関する研究助成事業の成果の中から優れた研究を顕彰するものです。選考委員会(選考委員長 亀井昭宏早稲田大学名誉教授)による厳正な審査の結果、2019年度に当財団が助成した研究成果(常勤研究者の部4件、大学院生の部4件)の中から、下記の方々が受賞されました。

贈賞式は、11月9日(月)当財団で開催しました。



受賞者の2人(前列中央)と選考副委員長(前列右)



馮氏(左)と当財団理事長



松井氏(左)と当財団理事長

(常勤研究者の部) 該当なし

(大学院生の部)

奨励賞 (副賞10万円)	『消費者クチコミ発話プロセスの解明 ～デコーディングとエンコーディングに注目して～』	馮 昕 慶應義塾大学大学院商学研究科後期博士課程
奨励賞 (副賞10万円)	『非発言者に着目した SNS 上の ブランドコミュニケーションメカニズムと対人影響の変化』	松井 彩子 一橋大学大学院経営管理研究科博士後期課程
奨励賞 (副賞10万円)	『自然災害におけるリスク・コミュニケーションに関する研究 ～避難情報の伝達行為による影響を中心に～』	福光 直美 広島大学大学院社会科学研究科博士課程後期

※常勤研究者の部の吉田秀雄賞／準吉田秀雄賞／奨励賞は該当なし、大学院生の部の吉田秀雄賞／準吉田秀雄賞は該当なし

吉田秀雄記念事業財団から助成を受けた研究による優れた研究成果を顕彰すべくスタートした「助成研究吉田秀雄賞」も、今年度で制定以来18年目を迎えることとなった。この間、多くの研究成果に対して「吉田秀雄賞」はもちろんのこと、「準吉田秀雄賞」あるいは「奨励賞」が授与され、助成研究の高水準化・質的充実に貢献してきた。

今年度は、今年3月末をもって研究が終了し、財団事務局宛に報告書の形で提出された研究論文(常勤研究者の部で4件、大学院生の部で4件の計8件。うち、2年間の継続研究による論文が前者で3件、大学院生の部では1件あった)を対象に、昨年度までと同様な第1次および第2次の2段階での選考が行われた。

第1次選考は、大学所属のマーケティング論および消費者行動論専攻の2名の研究者(共に教授)によって行われ、その結果をもとに、私と選考副委員長の仁科貞文先生(青山学院大学名誉教授)および事務局担当者2名とで協議を行い、結果として(総合得点および順位評価についての結果に基づいて)、常勤研究者の部で2件、大学院生の部では3件の論文を第2次選考に付することとなった。

第2次選考は、助成研究選考委員会委員14名全員による事前審査の結果を持ち寄って、去る10月2日に選考会会場に出席の委員5名、オンライン出席の委員7名、欠席の委員2名の構成をもって開催され、事前審査の結果だけでなく、出席委員全員による口頭での説明ないし補足評価を得て、長時間にわたっての白熱した選考が行われた。

今年度の選考結果については、常勤研究者の部および大学院生の部共に委員の評価結果が2極分化していたという傾向的特徴が見られた。その結果、総合評価は平準あるいは平均化されてしまい、例年見られる突出して高い評価を得た論文が1件も見当たらないという大変特異な結果を呈していた。そうした結果が特に顕著に表れていたのが、常勤研究者の部の1件の研究論文であった。半数近い選考委員が「吉田秀雄賞」、あるいは「奨励賞」以上の何らかの賞に該当するとの評価を示していた一方で、「全くの授賞外」という極めて厳しい評価を下した委員もおられ、評価得点を平均化すると、結局、授賞に値すると結論できる水準には達していないとの結論になってしまった。

こうした評価の2極分化が生じたのは、14名の選考委員の専攻分野

が多方面にわたり、それぞれ独自の評価の枠組みを有しておられることに加えて、評価のポイントを研究の手順、特に分析手続きや論述の厳密さなどの内容的な面(学術的意義)に置くのか、あるいは研究成果の実務的価値や社会的意義など(社会的インパクト)の大きさに置くのか、の意識の違いが、それぞれの委員にあったことによるように思われる。本論文については、実務的な意義の大きさが学術的な厳密さと綿密さに優るとする結論に届かず、残念ながら授賞に至らなかった。

常勤研究者の部のもう1件の論文も同様に評価が大きく分かれ、さらに下位評価が多かったこともあって授賞には至らず、今年度は常勤研究者の部では「授賞論文なし」という異例の結果となってしまった。

一方、大学院生の部でも常勤研究者の部と同様に評価の2極分化傾向が見られたが、比較的高い評価が多かったこともあって、3件の論文とも平均得点で例年の授賞水準を上回っていたばかりか、3件共にほとんど差のない評価結果を得ていたのが印象的であった。その内でも、松井彩子(一橋大学大学院経営管理研究科)さんと馮昕(慶應義塾大学大学院商学研究科)さんの論文は、前者がSNS上のブランドコミュニケーションのメカニズムについて、また後者が伝統的なクチコミのプロセスに関して、共に丁寧な研究の進め方や研究の発展性などについて高い評価を得て、見事「奨励賞」を授与することが決定された。また、福光直美(広島大学大学院社会科学研究科)さんの論文は、自治体広報の担当者としての経歴を生かし、災害時の避難情報の受信者の当事者性を高めるための貴重な研究として高い評価が得られた半面、実証手続き面での不十分さが指摘され、結果としてこれもまた「奨励賞」を授与するという結論に至った次第である。

来年度の第19回の選考に際しては、残念ながら今年度は受賞論文が見られなかった常勤研究者の部はもちろんのこと、大学院生の部でも「吉田秀雄賞」を受賞する研究論文が提出されることを願っている。研究助成受領者の方々におかれては新型コロナウイルス禍に負けることなく、ぜひ頑張って研究を進めていただけるよう心から祈念している。

Editor's Note

今、特にダメージを受けているのは、最も身近である「食」。改めて地域食文化の大切さを思う。命や健康、人との交流にも大きく関わる。美味しく、楽しく、幸福感を味わいながら食せる環境を次世代に引継ぐために、知恵と共助が必要だ。(傾)

最近、料理家のブログにハマっている。レシピの数の多さに驚くが、何より料理と食の楽しさの表現方法に感心する。周辺エピソードも織り交ぜられ、毎日更新されるストーリーを見ているようで面白い。まさに「食はコミュニケーション」であることを実感している。(葡萄)

コロナ禍によって以前からあった潮流が加速されるといわれています。食への関心の高まりはその一つです。外食業界などは現在、大きな打撃を受けていますが、この試練が食をめぐる産業の幅を広げるきっかけになることを願ってやみません。(ひろた)

AD STUDIES 2020年12月25日号 通巻74号
公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団
〒104-0061
東京都中央区銀座7-4-17 電通銀座ビル
TEL : 03-3575-1384 FAX : 03-5568-4528
URL : <http://www.yhmf.jp>

発行人 岩下 幹
編集長 布施博嗣
編集部 岩本紀子、沓掛涼香
編集協力 プレジデント社
表紙デザイン 八木義博・畠山大介、中谷晴子(Creative Power Unit)
撮影 片村文人

本文デザイン 南 剛(中曽根デザイン)
校正 株式会社ヴェリタ
印刷・製本 大日本印刷株式会社

©公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団
掲載記事・写真の無断転載を禁じます。